
The End.Arle's Life.

アルル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The End・Arle's Life・

【Nコード】

N0995K

【作者名】

アルル

【あらすじ】

これは歌詞と詩です。後半からかなりブルーになるものを連ねましたので、興味の有る方のみご覧下さい。

(前書き)

後半はかなり病んでいますので、そういった物への抵抗力の無い方はお気を付け下さい。

「僕はレジスター」

両の手を羽にして 一度で良いから飛んでみたい
何も無い空を ただ ひたすらに

両足だつて要らないさ もう帰る積りは無いんだ
あても無く 空を 悪戯に

そう 飛んで行きたい

心だけ有ればそれで良いのさ

陽に焦がれて 陽に“こげる”まで

真っ直ぐに飛んでみたいのさ

そうして 灰になつて 雲と手を取つて

自由気ままに流れたい

雲の機嫌が悪くなつたなら

雨になつて注ぐのさ

僕の想いを 僕の心を この色の無い世界に

顔を出した太陽が 等しくミンナを照らすだろう

孔雀みたいに そう 虹の様に輝く筈さ

ああ きつと 綺麗だろうな

「ワンピース」

皆が空を眺めてる “バベルの塔” に裂かれた空を

集めてるのは そのピース

探してるのは最後のワンピース

誰も彼もが必死になってる

でもね？ 見付からないよ？ 景色は変わっちゃうから

仮に有ったとしても きつと無理だろうな

どうしてだか解るかい？ 僕のズボンの右ポケット

そこに “何か” が有るからさ

「チルドレン」

キミは無邪気な仔ネコ いつでも在るがままさ

ボクはおバカな仔イヌ ご主人様に首ったけ

けれど どうしてだろう

そんな僕らでも 変わりがない気がするんだ

すごく 不思議なんだ ああ そうか

全部取っ払ったら 考え方が違うだけ

“生きてる”事に違いは無いんだ

そうか それならきつと 一緒に踊れる筈さ

「ハート」

清水が湧き出る様な 自然な言葉が浮ばない

清流の様に滑らかな 優しい心を描けない

何故だろうと考えたら 答えは頗る簡単だった

僕の心が醜いからだ

“ハートマーク”が有るけれど 僕のはちつとも似てやしない

気味の悪い変な形だ 色も匂いも気持ちが悪い

最初からこんなだったっけ？ 自分自身に問い掛ける

すると 誰かが呟いた

「違うに決まってるんだろ？」

そう 違ってたんだ 皆と同じじゃないけれど

こんなじゃなかった筈なんだ

育てたのは僕自身 全く“とんだ”遠回りだな

気付けばきつと大丈夫

風のように柔らかく 木々の様に囁いて

キミの心に届けるよ 僕の一番大切なものをさ それはね・・・

「プロポーズ」

キミの胸を 隠さず全部見せてくれ

とても小さいけれど 大きな夢が詰まっているね

すごく キレイだな 見惚れちゃったよ

今度は僕のを見てくれないか？

あまり大きくないけれど 沢山のユメが詰まってるぜ

これなんかどうだい？ キミにもあげるよ

要らないなんて言わないで 一つ摘んでみたら良い

腹の足しにはならないけれど 一瞬の輝きが味わえるぜ？

キミの目にはきつと映る筈だ ピカピカのその鏡になら

反射した光を僕が頂こう だって綺麗なんだもの

“ 妙ちきりん ” なユメでさえ キミの鏡で映したら
宝箱を開けたみたいさ

そんな素敵なキミに 僕は見惚れちまったよ

だから もう一つあげよう

“ プロポーズ ” ってユメをさ

「 終末の転機 」

紅い空を見上げると 星が沢山降って来た

それはとても神秘的で 美しいって言葉がぴったりだ

けれど . . . そんな世界僕は知らない

けれど . . . それが現実になっちゃった

一羽の鳥が羽ばたいて 一面の “ 紅 ” に吸い込まれた

それはとても幻想的で コマ送りにして観たいくらいさ

けれど・・・もうそれは無理なんだ

だから・・・僕らは先を見据えよう

瓦礫になった“バビロン”に 残されたのは僕らだけ

勿論 もう時間だって残ってない

何をしようか？ どこへ行こうか？ 考えたって意味が無い

紅い 紅い “プラネタリウム” 暗くないのが幸いさ

だって キミの顔が良く見えるから

泣いて でも 笑ってる 僕の大好きなキミの顔が

さあ 歌おう 最期のウタを

少しだけ目障りな あの雲を追い払って

降り注ぐ星に 僕らがなってしまうまで・・・

「ノン・レール」

キミとボクと二人きりで 夜を待って旅に出よう

闇に紛れてそっと歩けば きっと誰にも気付かれない

ボクはこの街が嫌いなんだ キミもそうだろうか？ 涙が滲んでるよ

煙みたいな毎日が どうしたって嫌なんだ

だから 行くんだけ 振り向きはしない

きっと ずっと キミと一緒に 陽の昇る場所を探そう

暗がりの中で蹲すくるのは これでお終いにしよう

ボクのこの目は光を待ってる キミもそうだろうか？ 大きな瞳がそ
う言ってる

霞みたいなこの街には無い 自然の光が欲しいんだ

雲の流れと反対に 行ける処まで行ってみよう

いつかきつと辿り着くんだけ 晴れた景色に 陽の差す街に

そこで何をするかって？ まだ何も決まっちゃいないよ

でもさ 楽しそうだろうか？ 決まってる事があるってのは

そう 選ぶ全てがボクらのものさ

「幻実に有る大切なモノ」

忘れない 共に過ごした日々を

凧いだ水面を 滲む景色を

一緒に歩いた 海辺の町を

泣きたくなる様な 温かな心を

生きてる事が幸せだった あの日々を

だから ずっと忘れない

憶えてる キミが話してくれた事を

哀しい世界を 滲む世界を

一人生き抜いた 哀しい町を

泣きたくなる程に 孤独な心を

生きてる事が 不思議だったろうその日々を

だから きつと憶えてる

守りたい 炎に焼かれるキミの心を

眠りの中で 悪夢と戦うキミの心を

一緒に過ごして 知った現実から

泣きたくなる位 純粹なその心を

生きる事は幸せだと そう思わせてくれたキミの心を

だから 守ってみせる

救いたい 煙に巻かれたこの世界を

醒めない夢に 拘る世界を

分かったのに 遣らなかったから

泣き腫らしたその顔を そつとこの手で

生きてる事が 幸せだと思えるように

だから 僕は歌うんだ

「良性の中毒」

語呂合わせなんてしたくない　それがホントの僕のウタ

韻を踏むのは宗教家で良い

念を籠めれば　言霊とすれば　どうしたって伝わるだろう？

メロディに頼るのは　三流の証さ

クラシックを聴いてみなよ

言葉も無く　情景が浮ぶだろう？

詰まりはそついう事さ

誰だって知ってるんだ　想像っていうヤツを

焦がれる事が有るのなら　キミに旋律は要らないのさ

さあ　遣ってごらん？　見えたならあと一歩

今度は想いに羽をあげなよ　心の中はきつと宇宙だ

色とりどりの世界が見える筈さ　キミもそこで踊れば良い

それがホントの・・・何だろね？

「とりとめの無いうた」

「ありがとう」 何度言っても足りないよ

星になった僕からじゃ キミにはもう届かないかもしれないけれど
それでも良いんだ

太陽が帰るのを待って キミをそっと見守るよ

乾いた土にキミが泣くなら 甘雨かんうになって僕も降ろう

咲き誇るキミが見たいんだ

空をごらん？ 僕が見えるだろうか？

きつとキミを見ているよ

“名も無き花” キミの姿を

“名の要らぬ花” キミの笑顔を

「It's sunny!」

地図を燃やした僕の未来は 見果てぬ限りの荒野だった

一歩足を踏み出してみたら いきなりの大当たり

身体がバラバラになっちゃった

仕方無いから頭で^も以って進むのさ 愉快に^も転がりながら

目が回るけれど その分色んなモノが見えるよ

たまに野花とお喋りして 自分のスピードで進むのさ

遠くに犬が見えたから 大きな声で呼んでみる

犬は僕を啜えると 穴の中に埋めちゃった・・・でもね

芽が出て花になれたんだ そんな姿でも

誰かが見てくれるなら きっとそれも人生なのさ

「Like Lovelletter」

どうしたっていうんだい？　すごく哀しそうに見えるよ

そんな処にしゃがんでいたら　誰かに踏ん付けられちゃうぜ？

足が動かないなら翼をあげよう　どこへだって飛んで行ける

もう哀しくはないだろう？　雲に上がってスキーをしなよ

太陽はきつと頷いてくれるさ　きつとそんなもんさ

面を上げれば光は見える　いつだって光は注いでるんだ

何が有ったってんだい？　酷い泣き顔じゃないか

そんな処で塞ぎ込んでると　ステキな人に出会えないぜ？

賢いキミだ　便箋をあげよう　思う事を全部書けば良い

少しは気が晴れたかい？　ペリカンにそれを渡しなよ

きつと誰かに届けてくれるさ　多分現れるぜ？

面を上げて見てみなよ　どうだい？　僕が居ただろう？

キミの心を抱き締めて　一緒に歩いて行こうじゃないか

ハッピーでもバッドでも どっちでも良いのさ

共に在る事こそが それこそが幸せなんだから

「己惚れ」

歌いたい事を歌うには 一体どうすれば良いんだろう

世界はとても綺麗なのに 僕の頭はブラックホールだ

せつかく捉えたモノ達が 次々と消えて行くんだ

一万年で築いた物のたった一つ その詩さえも書けやしない

問うまでも無く僕は無能だ ああ 今こそ星に願いを

「どうか僕に心を下さい」

一つで良いから 詩だけで良いから

「歌う力を僕に下さい」

もしも叶ったのなら もう何もねだったりしない

だから　せめて言葉を　心から紡ぐ言の葉を

満天の星空に　僕の願いは届いたかな　明日になったら歌えるのかな

・・・きつと　ダメなんだろうな　同じ道を歩くんだろうな

それでも世界は綺麗だろうから　文句なんて言えやしない

それなら僕は　今踏む一步を　生きた証にしよう

他に何も無いのなら　それがきつと僕の生きた証

「大切な、本当に大切な人へ」

「君に出会えて良かった」　それだけ言わせて呉れ

尤も　それしか思い付かないけれど　だからこそきつと聞いて呉れ

本当に　真剣に　心からそう思ったんだ

もう会う事は出来ないけれど　話す事は出来ないけれど

きつと　忘れないで呉れ

僕の正直な胸の内から溢れた想いを その言葉を

いつかまた逢う日には 僕も君も知らない人だろうから

けれど 憶えていられたのなら

知らない人同士でも 分かり合えるかもしれない

その時には また言うよ 「君に出会えて良かった」って

そうして今度は そう 今度こそは同じ道を共に歩こう

時間を超えて 世界を越えて いつか又出逢えたのなら

沢山の言葉を交わそう

二人の声は 温かな心は どんな時代でも変わらないから

「生きて最期に想う事」

沢山の思い出 忘れたくない記憶

僕にはそれがとても大切だ 他の誰にも譲らない

だから背中に羽を生やして 天まで昇って星になろう

虚ろな輝きでも きつと届くだろう 気が向いたなら眺めて呉れ

酒でも喰らって酔いどれちゃえば 少しはキレイに見えるだろうよ

一瞬でも輝けば それで良いのさ

だつてきつと 何かを照らせるだろう？

大好きな人なら尚更さ

言いたい言葉 聞き足りない声

僕にだつてそれくらいは有る 誰しもがそうである様に

だから朽ちて土に還って 大きな大きな木になろう

何千何万生き続ければ いつか二つとも叶うかもしれない

風にも雨にも負けなければ 少しは望みが有る筈さ

届くなら 神に祈って一握りの慈悲を

だつて僕は諦めたくないんだ

心から愛した人達との絆を

「二人オニ」のかくれんぼ」

いつもの公園 集まったのは仲の良い友達皆

誰かがかくれんぼをしようって言うから オニを決めるのにジャンケンをした

すると 僕の大好きな子がオニになっちゃった

皆はそれぞれ急いで隠れたけれど 皆が「まーだだよー」って言うてる間に

僕は真っ先に見付かっちゃった もちろんわざとそうしたんだ

その子は嬉しそうに「えへへ」と笑った 僕もつられて笑っちゃった

何もかも全部バレてたんだ

ちよつとだけ頬を紅くしながら

“皆が良いよって言うまでお喋りをしよう”って僕は言ってみた

その子はまた“えへへ”と笑った そうして良いよって言うてくれたんだ

もちろん“もういいーかい”は忘れない

僕は皆がずっと迷っていてくれないかなあって思ったけれど

しばらくすると“もーいーよー”って最後の一人が大きな声で言った

残念だなあとと思ったら その子が僕の手を握ってくれたんだ

すごく嬉しかったよ

そうして二人で皆を探したんだ

「先へ、更にその先へ」

ふと空を眺めてみた キレイな雲が流れていた

僕はどうだろう キレイなのかな

もう一度眺めてみた やっぱりそれはキレイだった

追い掛けたくなるくらいに

その時不意に風が吹いた そうして僕に囁いた

“走れば良いじゃないか”って

言われるままに僕は駆けた けれど雲には追いつけなかった

するとまた風が吹いて “その足は誰の物だい” と問い掛けた

その声に僕は頷いた

“この両足は僕の物だ!” 声を張り上げて言った

追い掛けても無駄なんだ

雲は雲 僕は僕 キレイかどうかは僕が決める事

目の前には沢山の道がある 右に左に上に下 斜めにだってもちろん有る

どれにしたって行くのは僕と この両足

踏みしめた跡の無いまっさらな道を 僕は真っ直ぐに駆けた 息を切らして

心を躍らせて何処までも そう どこまでも

ようやく辿り着いた “どこか” で 肩を上下させながら空を見上げると

虹色の雲が見えたんだ……

「Over the terminal」

今となつちや用無しの フレキシブルディスクの様な僕

誰も憶えちゃいないだろうし 存在すら知らない者も居る

温故知新とも言えない程に 役立たずな代物さ

“夢の島”に行こうにも “生もの”だから運んじゃくれない

そこいら辺で腐りたくても 近所迷惑甚だしい

早い処終わらせて 有る物全部片付けて

永久とこしえの眠りに就きたいんだ

夢の中でなら きつと誰かに逢える筈

僕を見てくれる誰かにさ

だからどうにかしれくれよ

早くしないと“丘”に昇つて叫んじゃうぜ？

流れる星やお月様と一緒にになって “世界は全部嘘っぱちだ！”
っ
てさ

きつと皆目を覚ましちゃうぜ？

本当のホントを詰め込んだ“マテリアル”を配っちゃうぜ？

良いのかな？ プロテスタント諸君

一か零かで決めてくれ じゃないと僕は噛み付いちゃうだろう

“出ても打たれない杭”の様にさ

「「僕の”ONE LIFE”」

ひまわりが咲いていた 誇る様に 胸を張って

だから “僕はまだ歌える” そう思った

ひまわりが枯れていく 落ち込む様に 項垂れて

だから “僕はもう歌えない” そう思った

もう何もかもがダメだと思ったんだ

だから 僕は眠る事にした

けれど　せめて大好きなあの娘こにはその事を伝えなくちゃ

そう思つて掛けたケイタイ　向こうから聞こえた言葉は

『太陽はまだ墜ちちゃいないぜ！』だった

そうか　そうだった　まだ咲いていた

彼女というひまわりが

そしてまた　僕は歌えたんだ

「レインボウ・イン・ザ・ライフ」

全部終わりにしよう　そう　人生も

魂を燃やして生きてみたけど　意外と早く尽きちゃった

“約束”が有るけれど　もうダメさ

きつとそれが一番良いんだ

“命は遣うもの”僕の考えだ　その通り　もう全て遣ってしまった

明日の陽を拝むよりも 煉獄れんじくに焼かれる方が良い

天国なんてまっぴらゴメンだ 幸せなんて僕には似合わないから
だから それで良いのさ

“いつか”なんて僕には無いだろう

“チェンジ・ザ・ライフ” 夢の向こう側さ

ただ せめて心だけは持って行きたい それくらいは良いだろう？

焼かれながらも夢に焦がれる 僕にはそれがお似合いさ

愛する皆はステキだから もう二度と会う事は無いだろう

書き綴った文章で満足して呉くれ・・・それも無理かな

何せ僕の書いた物は 世界とは隔離されてる

けれど伝わったなら もしも伝わったなら

それがきつと僕の人生なのさ

「お別れのウタ」

『さようなら、愛した人々』 僕の最期のメッセージ

別に受け取らなくても良いよ ただ 言っておきたかっただけ

そう 言っておきたかっただけなのさ

眩しい日差しの中で果てるのも悪くない 闇に紛れて眠るのもサイ
コだ

ああ 波の音が聞こえる 吸い込まれそうさ

ああ 水面に漂う事が出来たなら・・・

思う事は幾らも有るけど もう手遅れなんだ

全てがもうタイムアップ

ワガママだけど最期なんだ 聞き届けて呉れないか？

それくらい良いだろう？ なお神さま

「僕は幸せ」

人は皆平等だ　きっと守って呉れ

泣く人が有ったなら　手を貸して遣って呉れ

僕にはもう出来ないから

もしも星になれたなら　終末まで見届けよう

叶ったなら皆を迎えに行くよ　そうして手を繋いで輪を作ろう

ぐるぐる廻って楽しもう　泣いている子もきつと笑顔になる筈さ

太陽が少しだけジャマをするけど　じっと帰るのを待てば良いのさ

時間は限り無い程に有る

そうさ　終わりを迎えてもホントの終わりじゃないんだ

心だけ残っていれば　必ず一緒になれるに違いない

僕はそう信じているよ　だから　哀しむ事なんてないんだ

雨が降って土を濡らして　やがて咲く花々　それだけで充分さ

世界はまだ廻っているから　僕が居なくても大丈夫

重力に引かれて降るかもしれないけれど

キレイな軌跡を描けるのなら それはきつとステキな事さ

燃え尽きてしまっても土に還るなら いつか咲き誇る花の様に

そう 可憐な花の様に 誰かに愛でて貰えるかもね

「願い」

僕の肉は腐っているから早く処分しなきゃならない

僕の心も腐っているから早く肉から放たなきゃならない

こんな事に気付くのに随分時間を喰っちゃったよ

皆呆れてるだろ？ 僕も愛想が尽きちまった

けれど 灰にさえなっちゃえば きつと全部“チャラ”だろう？

良いさ そう遠くない内にそうなるんだから

こんな僕だ 養分にもなりやしない 夢の島へ捨てて呉れ

カラスの中に収まって しばらく空を旅するよ

けれど君だけは 光に焦がれて呉くれ

先へ進んで その手で何かを掴んで呉くれ

これは僕の“リアル”だから・・・

どうか 聴いて欲しいんだ

そして 一步の可能性を 一手のチャレンジを

君だけは捨てないで呉くれ

ワガママに聞こえるかな？ そうかもしれないね

でも 出来たらそうして欲しいんだ

闇に潜むのは僕だけで充分さ

どうか どうか 虹の橋を渡って欲しい

「Life・size・僕のリアル」

僕の人生は終わった 手には何も残っちゃいない

蚊帳の外で何をどうしたら良い？ 何をした処で全部無駄じゃないか
どうして今まで気付かなかったのか 自分でも全然分らないよ
もうすぐ桜が咲くっていうのに 僕だけ光も無く色も無い
敢えて言うなら灰色だ

動かない草木だって 花々だって その命にはちゃんと意味が有る
なのに僕にはそれが無いなんて・・・

ああ 四月は憂いの季節だ
事実を知らなきゃキレイだったろうな

後どの位居れば良いのか もう僕が決めて良いかい？
意味が無いのなら 光も色も無いのなら 何時だって良いだろう？
誰も文句は言わない筈だ

ああ そうしよう 生き物の踊る夏にしよう

あの海で 想い焦がれるあの島で
僕は僕の終わりを迎えよう

「皆、今まで有難う」

「遺言・二」

義務は果たす　それがケジメ　肉である僕は肉塊と化す

だから　その前に出来る事をしておこう

想いを紡ぎ　文を書く　想いを抱き　描き切る

話す言葉はもう要らない　残す物だけ有れば良い

それは紙束　想いを籠めた紙の束

それ以外には何も無い

定めし僕は馬鹿であるから　やおら欲しくなる生の光にしがみ付く
かもしれない

然し　決めたが最期　それは決着

だらだらしても“その時”は来る　そう決めたのだから

最早何の快樂も意味を成さない　導ミチの向く先を見ているだけだ

それは敗北じゃない　命を捧げる神の天啓

見届ける者は誰も居ない 受け取る者は在ったとしても

詰まりこれが僕の勝利

下らぬ矛で咽を突かれた 僕の勝利

白黒付けようぜ？

「幸福のうた」

季節はどれも美しい そこに生きる人達も

憂う事なんて本当は無いんだ

喜びに身を委ね^{ゆた} 愛に満ちた世界を楽しもう

条件なんて要らないさ 誰だって良いんだ そう 本当は誰だって
美しいんだ

きつとそうだろう？

食わず嫌いをしていたら 最期まで混ざれないぜ？

さあ 手を取って歌おう 空に向けて 星に届く様に

ウタっていう大砲で 眠りこけてる神サマを起こしてやるっぜ？

きつと驚くだろう 七色の世界から聴こえる賛美歌に

だからきつとそうしよう そうして行こう

壊れちまったラジオみたいに

r a r l e ' s g a m e
r

エースも絵札も無い 退屈なセブンブリッジ

裏ドラも横ドラも無い 欠伸の出るマーじゃん

僕が望むのはリスクーな勝負 それ以外に興味は無い

知ってるかい？ ポーカーにジョーカーなんて無いんだぜ？

ダブルアップこそが 或る意味ジョーカーだ

“フラグ”の立たないゲームなんて とつくの昔に卒業さ

君らはどうだい？ 安穩に隷従するかい？

黙然として そこに在るのかい？ ……違うだろ？

さあ 今こそ勝負の時だ 言つとくがチップは君らの魂だ

“レイデイス エンド ジェントルメン” イッツ ショータイ
ム!

好きなだけ張りなよ 脳内麻薬でトリップするまでノンストップだ

僕も勿論参加するぜ? きつと圧勝しちまうけどね

振ったが最期 賽は戻らない・・・覚悟は良いかい?

じゃあ 始めようか! 負けたら終わりのステキな博打はくちを!

END

(後書き)

如何でしたでしょうか。かなり狂っているなと思われたかもしれ
ません。ですが、これらは全て僕だけのリアルです。遺言というタ
イトルにも嘘偽りは有りません。ですので、どうかこの場にてその
ような物を載せる事をお許し願いたく存じます。読了されました方
が居られましたら感謝いたします。どうも有難う御座いました。

a r l e

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0995k/>

The End.Arle's Life.

2010年10月20日07時45分発行